

5. 銀行制度と私的所有

貨幣資本の社会化

今回の課題

- ✓ 銀行業務の基本を確認する。
- ✓ 銀行制度の成立による私的所有のゆらぎを明らかにする。

今回の内容

- ▶ 銀行の役割
- ▶ 銀行と私有財産制

1. 銀行制度と資本主義

これまででは…

- 金融業者は無視
- 企業間で資金融通が可能
- 個人金融資産は死蔵

しかし実際は…

1. 金融業者が企業間での資金の融通に介在する
 - a. 間接金融の場合は銀行など
 - b. 直接金融の場合も証券会社など
2. 金融業者を通じて個人金融資産も社会的に活用される
 - ▶ ここでは銀行という金融業者を考察する

銀行とは？ ●

＝ 預金を取り扱う金融機関

1. 社会全体の決済機構を担う。
 - ∴ 預金は通貨
 2. ありとあらゆる経済主体のカネを握る。
 - ∴ 零細預金者保護の必要性
- ↓ したがって、
- 高度の公共性が求められる。

銀行制度とは？(1)

- 個々の銀行ではなく、銀行制度が問題になっていることに注意。
- 銀行制度
 - 個別契約ではなく、一つのシステムとして銀行間関係（特に内国為替）が完成している。
 - 日本国内でいうと、全銀システムの中で、日銀当預の移動で銀行間での決済が完了し、社会全体の全決済が最終的に完了する。

銀行制度とは？(2)

- 日々の取引のための購買・支払手段も、突然の支出に備えるための購買・支払準備金も、一定額が貯まるまで保蔵される蓄蔵貨幣も、預金形態で銀行制度に集中されている。
 - 購買・支払手段や購買・支払準備金は要求払預金で、中長期的に保蔵される蓄蔵貨幣は定期預金で。

銀行制度とは？(3)

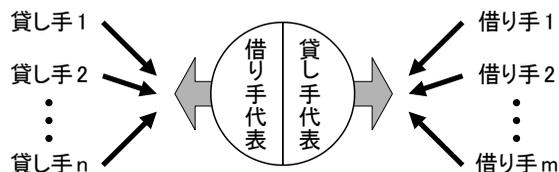
- 基本的に銀行制度内での預金の振替によって貨幣の通流が完結している。
 - 企業間決済も労働者への給与支払も（行内または）他行への振替で完結する。
 - たとえ個人等がATMで現金をおろしても、スーパーで果物を買えば、（スーパーにとって日常的に必要な現金の準備を越える限り）スーパーから銀行制度に還流する。
 - 信用創造によって、預金には現金の裏付けがない。

要求払預金の特徴

- 預金通貨
 - 口座振替によって
- 信用創造
 - 預金設定によって

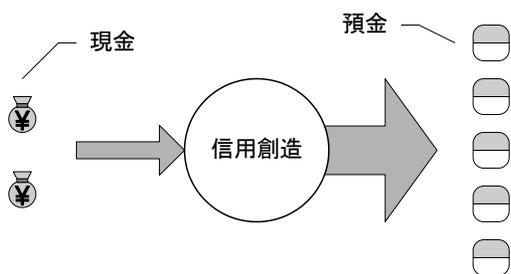
銀行は単なる仲介業者ではない (1)

- 借り手・貸し手を集中



銀行は単なる仲介業者ではない (2)

■ 信用を創造



2. 私的所有と銀行制度

銀行の理論的意義

- 資本主義を成立させた市場の制限を克服する。
- 1. 流通という制限
 - 流通費用の減少, 流通時間の短縮
- 2. 私的所有という制限
 - 社会的な総資本の配分
 - 私的な個別資本の集中

私的所有と銀行制度

- 貨幣の社会性
 - 貨幣の集中
 - 私的個人という制限を克服
- 貨幣の他人性
 - 貨幣の融通
 - 自己所有という制限を克服

2.1 私的な個別資本の集中

銀行による私企業のモニタリング

- 個々の企業の情報の管理
- ↓ これを通じて
- さまざまな企業の情報の集中
- 他のすべての私的資本に対して、社会を代表する。
- 私益の追求による公益の実現
- △ かつ
- 資本の私的な利益追求行動への公益性の従属

私的な個別資本の集中

- 自己金融ではもちろんのこと、単なる貸付でも不可能だったような規模で資本蓄積が行われる。
- 原理的に見て、個別の私的資本は、貨幣形態において、社会の隅々からかき集められた、しかも銀行によって創造された、他人の、しかも社会の資本になっている。
- 資本集中のテコになる。

2.2 社会的な総資本の配分

利潤率

1. 個別的利潤率
⇒ 各企業の利潤率
2. 特殊の利潤率
⇒ 各部門の利潤率
3. 一般の利潤率
⇒ 社会の利潤率

期待利潤率と実現利潤率(1)

- 期待利潤率
⇒ 利潤率の期待値（平均値）
- 特殊の利潤率の期待値
 - その部門に属する各個別資本が実際に獲得している個別的な実現利潤率は様々であっても、投資先としては、“この部門に投資すれば平均してこのくらいは儲かると期待していいだろう”という、部門の利潤率の期待値が成立している。
 - もちろん、実現利潤率としては、同じ部門の内部でも大儲けしている資本も大損こいている資本もある。

期待利潤率と実現利潤率(2)

- 個別的利潤率の期待値
 - 各資本は投資先を決める際に、自己の個別的利潤率の期待値が最も高くなるような投資先に投資するはずである。その際に基準になるのが、
 - より高い部門の特殊の利潤率
 - 自己の個別的な経営リソース
 - もちろん、実際の実現利潤率は不確実性の下にある（やってみなければ分からない）。その投資が大儲けに終わることも大損に終わることもある。

期待利潤率の均等化傾向

- ⇒ 資本の部門間競争が存在している限り、部門の特殊な期待利潤率がどの産業部門でも同じになる傾向にあるということ
- 資本の部門間競争によってもたらされる
 - 儲かっている部門には企業が参入
 - 供給増大 ⇒ 供給 > 需要 ⇒ 価格低下 ⇒ 利潤減少
 - 儲かってない部門からは企業が撤退
 - 供給減少 ⇒ 供給 < 需要 ⇒ 価格上昇 ⇒ 利潤増大

不均衡化と再均衡化

- 部門の期待利潤率は、需要の変動と供給条件の変化とによって絶えず不均衡化する。
- 不完全ではあっても競争が成立している限りでは、この不均衡は再均衡化される傾向にある。
- もし再均衡化が成功すれば、社会の経済的資源（つまり労働力と生産手段）の効率的配分が回復される。

現実資本移動と貨幣資本移動

- 部門間での資本移動は、結局のところ、労働力と生産手段との再配分である。
- しかし、ゼネコン業界から製パン業界に資本が移動するといっても、生コン車がパンをこねるようになるわけではない。
- 労働力と生産手段との再配分は貨幣資本の再配分によって達成される。

社会的総資本の配分

- 銀行制度は社会のすべての資本を貨幣形態（預金形態）で集めて運用する。
- ↓これによって
- 利潤率の均等化を媒介する。
- ↓これによって
- 資本の部門間移動を媒介する。
- ↓これによって
- 社会の経済的資源（生産手段・労働力）の効率的配分を実現する。

株式会社でもいいのでは？

- 株式の公開・流通を通じて部門間で貨幣資本がスムーズに移動するためには、これはこれでやはり、預金という形で銀行に社会の貨幣資本が集中されているということを前提する。